HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	階層形成過程と階層分化の要因 : 階層形成過程としての生活史
Author(s)	野崎, 剛毅
Description	第4章
Relation	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容 : 2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書. 小山透編著
Citation	北海道アイヌ民族生活実態調査報告 : Ainu Report, その2, 95-108
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48975
Type	departmental bulletin paper
File Information	AINUrep02_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第４章　階層形成過程と階層分化の要因
――階層形成過程としての生活史――

野崎　剛毅

國學院大學北海道短期大学部准教授

はじめに

北海道環境生活部（2007）や北海道大学アイヌ･先住民研究センター（2009）などで明らかになっている通り、アイヌの人々の経済状況や教育達成は、和人と比較して低いものとなっている。だが、当然ながら、すべてのアイヌが厳しい生活環境に置かれているわけではない。和人と同等、もしくはより豊かな生活をしている者もいる。アイヌの人々の中の、このような違いはなぜ生まれるのであろうか。本章では、アイヌ民族内部での階層分化の要因を、生活史の中から明らかにすることを試みる。

第１節　分析の視点

階層形成のメカニズムは一様ではない。まず、男性と女性とでは、階層形成のメカニズムも異なる。男性の到達階層は本人の学歴や職業によって規定されるのに対し、女性の到達階層は本人の学歴・職業よりも、むしろ結婚相手の学歴・職業によって規定されることが多い。とくに、女性は専業主婦になることが当然とされていた世代にとって、この傾向は強いことが予想される。

進学率を考慮すると、世代によっても階層形成のあり方は異なるだろう。たとえば、「四年制大学卒業」の持つ意味は、20 代と 60 代では重みの違うものとなる。また、一つの企業内においても、平社員からスタートし様々な職業・部署を経験しながらキャリアアップをしていくという形が一般的であるわが国においては、若い世代と退職間近の世代の職業階層を区別せずに扱うことは適切でない。とくに、近年、雇用の不安定化が指摘される青年層においては、現在の職業を到達階層としてみることには問題が多いだろう。

そこで、本章においては調査対象者を性別と世代によって分類し、それぞれに階層形成過程をみていくことにする。具体的には、世代を青年層（～ 30 代）、壮年層（40 ～ 50 代）、老年層（60 代～）の３つに分け､それをさらに男女別にみていくことにする。これにより､カテゴリーごとのケース数は少なくなってしまうものの、階層の形成過程をより実態に即した形でみていくことができると考える。

次に、階層の形成過程とその要因をみるための変数を確認しておこう。

出身階層を見る際、通常使われるのは親、とくに父親の職業階層や経済階層である。しかし、本調査は個人の生活史を重点的に聞いているため、父親の具体的な職業については十分な情報が得られていない。そこで、出身階層の指標としては「中学校を卒業するころの家族の暮らしぶり」を使用する。これは､15 歳時点での暮らしぶりを聞いたものを､「豊かであった」「普通」「苦しかった」の３段階に振り分けたものである。あくまでも回顧的でかつ主観的な評価であることには注意が必要であり、とくに高齢の対象者では、同様の生活環境であっても「苦しかった」と評価するケー

スと、「周りもみな同様の生活をしていたので普通だと思っていた」と評価するケースがある。ただ、世代で区切ることによりこのような主観と客観の差はある程度解消されると考えられる。

到達階層としては、「年収・個人」と「年収・世帯」の２種類を状況に応じて使用する。また、職業階層として「現在職業」を主に使用する。これは、具体的な職業として聞いたものを、日本標準職業分類・大分類にしたがって分類したものである。ただし、老年層を中心に、現在無職である者も少なくない。無職である場合は、以下の手順によって職業階層を確定した。まず、老年層で定年退職をしている者については、原則としてもっとも長期にわたって就いていた職業を到達階層とする。明確なキャリアアップなどで職業を変わっている場合や、自らの会社を興した場合などは、就いていた期間にかかわらずそちらを到達階層とする。定年前で無職になっている者については、原則として直近の職業を到達階層とする。

階層形成の基本的な説明変数としては、最終学歴を設定する。アイヌ民族の学歴については、和人と比較して高等学校や大学などへの進学率が低いこと以外にも、中退率が高いことがわかっている。また、老年層を中心に、家庭の事情などにより義務教育も事実上ドロップアウトしている者が多くいる。そのため、進学した学校段階だけでなく、卒業したか、中退であったかも重視することにする。

第２節　男性の階層形成過程

第１項　男性青年層

男性青年層は、全体と比較して学歴が高く、17 人中４人が四年制大学を（１人は在学中）、４人が専門学校を、２人が短期大学を卒業している。一方で、まだキャリアが短いこと、また、90 年代、00 年代の就職氷河期を経験しているためか、個人の年収は低いという特徴がある。個人年収の平均は 200.0 万円であり、男性平均の 247.3 万円の５分の４ほどでしか無い。もっとも年収が高い者でも、「300 ～ 400 万円未満」（ともに 30 代）であり、20 代は 300 万円未満ばかりである。

15 歳時点での暮らしぶりが「苦しかった」と答えた者は７人で、他の世代と比較すると少ない。青年層は 1970 年以降生まれであり、30 代後半でも 15 歳時点ですでにバブル景気が始まっている。本人たちの主観だけでなく、客観的にみても、他の世代と比較して豊かな環境にあったといえるだろう。未婚の者が７人いる点も特徴的である。

表４－１は、男性青年層を、世帯年収の高い順に並べている。世帯年収が 500 万円を超える【１】～【６】は、未婚者が多く、自身の収入と親を中心とした家族の収入とで生活をしている。【７】～【11】には本人の収入が家計を支える既婚者が続く。【12】～【17】は、本人の収入が低く、世帯年収も配偶者のパート収入や親の年金だけという者が多い。

男性青年層の階層形成過程の特徴として、第一に階層を上昇していく上で有利になると一般的に考えられる要素が、有利に働いていない点があげられる。たとえば 15 歳時点の暮らしぶりと現在の個人年収や世帯年収との間に相関関係はないようである。また、最終学歴が大学卒業である者も、必ずしも高収入を得ているわけではない。個人年収が「300 ～ 400 万円」と、この世代の中ではもっとも高い【３】は中学校卒、【７】は高等学校中退である。両者に共通するのは、中学卒業後、また高等学校中退後すぐに働き始め、それを継続していることである。【３】は中卒後２年間働き、17 歳で転職すると、以降 16 年間同じ会社で働き続けている。【７】は中退後造園業にいっ

表４－１　男性青年層の階層形成過程

	結婚	15歳時点生活	最終学歴	卒業・中退	職業	年収・個人	年収・世帯
1	未	普通	専門学校	卒	農林漁業	―	1,000万円～
2	未	普通	高校	卒	生産工程	200～300万円	600～700万円
3	既	苦しい	中学校	卒	建設・採掘	300～400万円	500～600万円
4	離	普通	大学	卒	販売	200～300万円	500～600万円
5	未	普通	専門学校	卒	サービス職	200～300万円	500～600万円
6	未	苦しい	専門学校	卒	専門・技術	200～300万円	500～600万円
7	既	普通	高校	中	輸送	300～400万円	300～400万円
8	既	苦しい	短大	卒	販売	―	300～400万円
9	既	普通	大学	卒	生産工程	200～300万円	300～400万円
10	再	苦しい	中学校	卒	販売	200～300万円	200～300万円
11	既	苦しい	短大	卒	販売	200～300万円	200～300万円
12	既	苦しい	中学校	卒	運搬・清掃等	100～200万円	100～200万円
13	未	普通	専門学校	卒	無職（サービス）	100～200万円	100万円未満
14	未	豊か	専修学校	卒	無職（建設・採掘）	なし	100～200万円
15	既	普通	大学	卒	無職（サービス）	なし	100万円未満
16	未	不明	高校	中	無職（建設・採掘）	100万円未満	―
17	未	苦しい	大学	在	学生	―	―

注）1.左端の数字は本章の通し番号であり、他章の対象者番号とは一致しない。
2.「結婚」欄は、「未」→「未婚」、「既」→「既婚」、「離」→「離別」、「死」→「死別」、「再」→「再婚」である。

たん就職し、その後３回の転職を経験しているが、いずれもキャリアアップにつながっている。

キャリアアップの途上である青年層において、「年収」という観点では就業を継続することの持つ意味が重くなる。加えて、就職氷河期世代にあたるこの世代では高い学歴が高い収入につながらず、結果として学歴と職業、年収がほぼ無相関となっている。四年制大学を卒業した３人はいずれも専門にかかわる職業にはつけていない。また、唯一専門・技術職（パソコン講師）と呼べる職業についた【６】は専門学校、しかもパソコンとは無関係である音楽の専門学校卒であった。

青年層世代の特徴の二点目として、雇用の不安定さが挙げられる。多くの者が自らの意思とは関係なく職を失う経験をしている。また、それと関連し、取得した資格等を生かす場面に恵まれていないことも指摘できるだろう。たとえば【９】は大学卒業後、整骨の専門学校へも通ったが、資格を生かせる職業にあきがなく、調理助手の契約社員として就職をした。その後、アルバイトを転々とし調査時点では食品工場の契約社員をしつつ、正規で働ける職業を探している。

無職の者も、学生を除いて【13】～【16】の４人いる。このうち、【15】は過労で体調を崩し無職となっ

たが、他の３人については、たとえば【13】はカイロプラクティックの専門学校を卒業したものの仕事がみつからず、アルバイトを転々として、７月に失業をした。【16】も、工業高校を中退した後、アルバイトと不定期に入る派遣労働で糊口をしのいでいる。

これらの特色は、いずれもバブル崩壊から「実感なき好景気」を経てリーマン・ショックへといたる時代的な要素の影響が強いと考えられ、アイヌ民族であることの特殊性とは言いがたい。アイヌ民族であることを理由とするいじめや差別を受けた経験も、青年層では少なく、あったとしても小中学校時代が中心である。日本社会全体の低迷が、民族の問題を隠れさせた時代であるといえる。

第２項　男性壮年層

社会の中枢となる壮年層は、500 万円以上の高い年収をえる者もいる反面、300 万円未満の層も多く、世代内格差が大きい。個人年収の平均は 426.7 万円と、青年層の倍以上である。世帯年収の平均は 543.8 万円である（表４－２）。

最終学歴では、大学卒は１人しかおらず、専門学校も３人だけである。中学校卒が２人で後は高等学校へ進学（卒業７人、中退４人）している。

15 歳時点の生活ぶりは、11 人が「苦しい」と答えている。「豊かだった」という者は一人もおらず、青年層とは異なり、高度経済成長期に少年期を過ごした世代を象徴しているといえるだろう。未婚者は２人で、15 人は死別、離別も含めて結婚を経験している。

壮年層をみると、青年層と異なり学歴から職業を経て経済的に高い階層へいたるという経路が機能していることがわかる。個人年収を基準にすると、この世代では相対的に学歴の高い高校卒業者と専門学校卒業者が年収上位に並ぶ。収入の上位は農林漁業が３人続き、唯一の大卒者である【20】も農林漁業を営んでいる。

農林漁業の３人はいずれも実家を継いだ者である。【18】は高校卒業後に父親を手伝って「山の仕事」を始めた。主に下草刈りなどをしながら 15 年ほど続けた後、農業を継ぐことになった。父の代から始めたメロン栽培が現在の主力となっている。【20】は大学を卒業してからサラリーマンとして働いた後、バブル崩壊の影響で解雇されて実家に戻り農家を継いだ。こちらも主力はメロンである。両者とも、年収は大きいがその分経費も大きく、利益は少ないという。【19】は父親の代から漁業を行なっており、高校卒業後に漁業関係の専門学校へ通い、跡を継いだ。漁業だけでは生活が安定しないという理由から水産加工をし、直売所で売るということを始めている。

一方、高校中退者や中学卒業者は年収 400 万円以下の低い層になってしまっている。彼らの多くは、中卒、高校中退後に職業を転々としている。その多くは、リストラであったり、職場の上司や同僚とそりが合わなかったりといった消極的な理由であり、キャリアアップにつながっていない。なお、【34】は中学卒業後に働き始め、そこでの経験から 33 歳の時には自ら会社を興した。経営は順調で 20 年続いたものの、体調を崩して辞めることになっている。

高度経済成長後期からその後に続く低成長期に職業キャリアをスタートした壮年層は、わが国の学歴社会としての側面を痛烈に経験した世代であったといえる。とくに高等学校の進学率が上昇し、ほぼ全入になったのもこの世代であるため、高校へ進学しなかった人々にとって、その負の側面が強調されたともいえるだろう。

表４－２　男性壮年層の階層形成過程

	結婚	15歳時点生活	最終学歴	卒業・中退	職業	年収・個人	年収・世帯
18	既	苦しい	高校	卒	農林漁業	1,000万円～	1,000万円～
19	既	普通	専門学校	卒	農林漁業	―	1,000万円～
20	既	普通	大学	卒	農林漁業	800～900万円	―
21	既	苦しい	高校	卒	専門・技術	700～800万円	800～900万円
22	既	苦しい	高校	卒	建設・採掘	600～700万円	700～800万円
23	既	苦しい	専門学校	卒	生産工程	500～600万円	700～800万円
24	死	苦しい	高校	卒	事務	500～600万円	500～600万円
25	既	苦しい	高校	卒	運搬・清掃・包装	400～500万円	400～500万円
26	未	普通	専門学校	卒	建設・採掘	300～400万円	300～400万円
27	既	苦しい	高校	卒	販売	300～400万円	1000万円～
28	既	普通	高校	中	専門・技術	300～400万円	300～400万円
29	離	苦しい	高校	中	農林漁業	300～400万円	300～400万円
30	再	不明	高校	中	建設・採掘	200～300万円	200～300万円
31	既	普通	高校	中	専門・技術	200～300万円	200～300万円
32	未	苦しい	中学校	卒	建設・採掘	200～300万円	―
33	既	苦しい	高校	卒	事務	200～300万円	300～400万円
34	既	苦しい	中学校	卒	無職（建設・採掘）	なし	100～200万円

また、まだ貧しい家庭が多かった世代であることも、壮年層の地位形成をみるうえでは無視できない。進学を希望していたものの家計の都合で断念したという者も多い。このことが、全体でホワイトカラーの仕事をする者が５人しかおらず、ほとんどがブルーカラーであることに影響を与えている。

壮年層では、小中学生の時にアイヌ差別を受けた経験のある者が多い。しかし、それが職場にまで及んでいるケースは少なく、差別により転職・離職を余儀なくされたという者もいない。転職の理由の多くは個人の事情であったり、あるいは彼らのキャリア中盤に訪れたバブル崩壊の影響であったりする。ただ、アイヌの人々のかつての貧しさが学業継続の断念やブルーカラー職への就職を強く規定している以上、壮年層は過去のアイヌ差別の影響を間接的に受けた世代であるといえるだろう。

第３項　男性老年層

60 代以上の老年層は、半数以上が既に定年退職をしており無職である。しかしそれでも、平均年収は 258.3 万円と、青年層よりも高い。世帯年収が 322.2 万円と、個人年収との差が小さい。大学へ進学した者は 22 人中２人（うち１人は中退）、高校進学者は５人と少数である。また、中学校へも行かなかったという者が３人いる（表４－３）。

表４－３　男性老年層の階層形成過程

	結婚	15歳時点生活	最終学歴	卒業・中退	職業	年収・個人	年収・世帯
35	既	豊か	高校	中	農林漁業	1,000万円～	1,000万円～
36	既	苦しい	小学校	中	管理的職業	400～500万円	—
37	既	豊か	高校	卒	販売	300～400万円	800～900万円
38	既	苦しい	中学校	卒	販売	300～400万円	300～400万円
39	既	苦しい	高校	卒	専門・技術	300～400万円	300～400万円
40	既	不明	大学	卒	無職（専門・技術）	300～400万円	—
41	既	苦しい	中学校	卒	農林漁業	300～400万円	300～400万円
42	再	苦しい	中学校	卒	販売	200～300万円	200～300万円
43	既	普通	中学校	卒	無職（生産工程）	200～300万円	400～500万円
44	既	苦しい	小学校	卒	無職（販売）	200～300万円	300～400万円
45	既	苦しい	高校	卒	農林漁業	—	300～400万円
46	既	豊か	高校	卒	無職（輸送・機械運転）	100～200万円	200～300万円
47	既	苦しい	中学校	卒	農林漁業	100～200万円	200～300万円
48	既	普通	大学	中	専門・技術	—	200～300万円
49	離	苦しい	中学校	卒	無職（専門・技術）	100～200万円	100～200万円
50	既	苦しい	中学校	中	無職（建設・採掘）	100万円未満	100～200万円
51	既	苦しい	小学校	中	無職（輸送・機械運転）	100万円未満	100万円未満
52	死	苦しい	中学校	中	生産工程	100万円未満	—
53	離	苦しい	中学校	卒	無職（農林漁業）	100万円未満	100万円未満
54	既	苦しい	中学校	中	無職（農林漁業）	—	100～200万円
55	既	苦しい	中学校	卒	無職（農林漁業）	—	100～200万円
56	既	普通	中学校	卒	農林漁業	なし	—

老年層における到達階層を確定することは難しい。だが、現時点の収入や最終的な職業からみると、老年層もまた、出身家庭の経済状況や学歴が、そのまま職業へと直結した世代であるといえるだろう。

たとえば【39】は、高校が高嶺の花とされており、また11人きょうだい中８人が中学卒業後に進学せず家業を手伝っていたという環境の中で高校を卒業し、いくつか仕事を転々とした後に自衛隊、運輸会社などを経て札幌市の職員になっている。本人は、高校での勉強は卒業後まったく役に立たず、何のために勉強したのか疑問に思っているというが、市役所職員といった公務員になった背景には、高校進学の学歴は多少なりとも影響したのではないだろうか。

老年層の人々における15歳時点とは、戦時中から高度経済成長中盤ほどまでである。日本社会全体がまださほど豊かでなく、とくに北海道の農村部は貧しかった。高校進学率も上昇を始めているものの、まだ一般的ではなく、中卒就職者が「金の卵」と呼ばれていたのもこの世代である。そのような皆が一様に貧しかった時代に、「豊かであった」と回顧できる者は、高校へ進学することができた。これが、充実した職業キャリアにつながり、同世代の多くがリタイアした現在の収入までをも規定している。

ただ、皆が一様に貧しかった時代であったからこその逆転もあった。たとえば【36】は、貧しい生活と同級生からのアイヌ差別もあって、７歳の時には小学校へも行かなくなった。その後、奉公に出て戦後は進駐軍の仕事をし、20代中盤になってから読み書きをならった。結婚してからは妻と協力して食堂を経営し、またアイヌ工芸品の制作・販売をおこなった。その後も努力を続け、現在ではビルのオーナーとして家賃収入で老後の生活を送れるようにまでなった。このような逆転劇は【36】にとっても誇りであるようだ。

第３節　女性の階層形成過程

第１項　女性青年層

女性の青年層は、男性青年層以上に厳しい経済状況に置かれている。学歴をみれば、全員が中学卒業後、何らかの学校へ進学をしている。また、15歳時点での生活水準も、「豊かであった」という者こそいないが、「苦しかった」という者も３人しかいない。大学進学者が12人中２人、短大を合わせても４人というのは、同世代の和人と比較すれば高いとはいえない。しかし、アイヌ女性の壮年層、老年層と比較すれば、明確な高学歴化といえるだろう（表４－４）。

だが、それでもその学歴は収入へはつながっていない。個人年収の平均は122.7万円で、専業主婦の２人を除いたとしても150万円にすぎない。もっとも年収の高い【57】であっても、「200～300万円」であり、他はすべて200万円未満である。大学や短大といった学歴も、収入を押し上げてはいない。その背景にあるのは、男性青年層と同様に不況であると考えられる。女性青年層の多くは、学校卒業後に正職へつくことができず、派遣やアルバイト、パートを転々とするというキャリアを送っている。男性では何人かいたような、長年にわたって勤め続け収入をあげるというケースもほとんど見られない。このような状況が、女性の経済的自立を大きく妨げているといえるだろう。

表４－４　女性青年層の階層形成過程

	結婚	15歳時点生活	最終学歴	卒業・中退	職業	年収・個人	年収・世帯
57	未	普通	短大	卒	サービス職	200～300万円	—
58	未	苦しい	大学	卒	事務	100～200万円	700～800万円
59	未	普通	専門学校	卒	事務	100～200万円	700～800万円
60	未	苦しい	大学	卒	販売	100～200万円	600～700万円
61	既	普通	専門学校	中	運搬・清掃・包装	100～200万円	400～500万円
62	未	苦しい	高校	卒	販売	100～200万円	—
63	既	普通	高校	中	農林漁業	100～200万円	—
64	既	普通	高校	卒	事務	100万円未満	300～400万円
65	既	普通	高校	中	専業主婦	なし	300～400万円
66	既	普通	高校	卒	専業主婦	なし	300～400万円
67	離	普通	専修学校	卒	事務	100～200万円	100～200万円
68	未	普通	短大	中	販売	—	—

第２項　女性壮年層

女性壮年層もまた、青年層と同様に個人年収は低い。平均は 130.4 万円であり、個々でみても「300～400 万円未満」が３人いるだけである（表４－５）。男性壮年層が、青年層と比較して年収の平均を大きく引き上げたこととは、大きく事情が異なっている。その背景には「配偶者控除」があると考えられる。夫が主たる収入を得ている場合、妻は配偶者控除の対象となる。その際、よく知られているように、年収を抑えないと控除が受けられない。その結果、女性壮年層の年収は低く抑えられることになる。

個人年収の低さと違い、世帯年収は 411.4 万円と高い。これは、女性の階層を見る際に徒前から指摘されている通り、結婚の影響が強く出るためである。女性壮年層 25 人のうち、未婚者はわずかに一人だけであり、それ以外の 24 人は離別、死別も含めた結婚経験者である。そして、世帯年収上位には既婚者、つまり現時点で配偶者がいる者が並んでいる。「既婚者」の平均世帯年収は 511.5 万円にまで増える。一方で離別者、死別者などは、夫からの収入がなくなるため、当然のことながら世帯収入は減る。その平均は 281.3 万円と、既婚者の５分の３ほどにまでなっているのである。

このように、女性壮年層にとって到達階層を決めるのは、15 歳の時の暮らしぶりでも最終学歴でもなく、結婚しているかどうか、そして、それが継続しているかどうかである。この状況において、アイヌ民族の問題としてとくに重要となるのは結婚差別の問題である。対象者のなかで露骨な反対にあった者は少ない。しかし、反対されることを恐れて隠していたという者は、現在でもいる。また、アイヌ同士の結婚では、双方の親から、これまで薄まってきたアイヌの血が、ふたたび濃

くなることを嫌悪する発言があった（「アイヌとアイヌが結婚したら子どもがかわいそう」「せっかく薄めたのに何で濃くするんだ」）という事例も存在する[1)]。

もちろん、結婚は経済階層を決めるためだけにするものではない。だが、女性自身の収入が、配偶者控除という事情を差し引いても低い水準に留まるなかで、アイヌの女性にとって民族差別は

表４－５　女性壮年層の階層形成過程

	結婚	15歳時点生活	最終学歴	卒業・中退	職業	年収・個人	年収・世帯
69	既	豊か	高校	卒	サービス職	100万円未満	1,000万円～
70	既	苦しい	高校	中	専門・技術	100～200万円	700～800万円
71	死	豊か	高校	卒	販売	100～200万円	700～800万円
72	既	苦しい	高等専修学校	卒	販売	なし	700～800万円
73	既	普通	高校	卒	農林漁業	―	600～700万円
74	既	苦しい	中学校	卒	専業主婦	なし	500～600万円
75	既	不明	専門学校	卒	サービス職	100万円未満	400～500万円
76	既	普通	高校	卒	専業主婦	なし	400～500万円
77	既	不明	高校	卒	専業主婦	なし	400～500万円
78	離	不明	高校	卒	サービス	300～400万円	―
79	死	苦しい	専門学校	卒	事務	300～400万円	300～400万円
80	離	苦しい	中学校	卒	事務	200～300万円	300～400万円
81	既	普通	中学校	卒	サービス職	100～200万円	300～400万円
82	既	豊か	高校	中	運搬・清掃・包装	100～200万円	300～400万円
83	既	普通	専門学校	中	農林漁業	100万円未満	300～400万円
84	離	普通	高校	卒	サービス職	200～300万円	200～300万円
85	離	豊か	高校	卒	専門・技術	200～300万円	200～300万円
86	既	苦しい	高校	卒	保安	100～200万円	200～300万円
87	既	苦しい	高校	中	事務	なし	200～300万円
88	再	普通	高校	卒	パート	100～200万円	100～200万円
89	離	苦しい	高校	卒	販売	100～200万円	100～200万円
90	離	豊か	高校	中	サービス職	100万円未満	100～200万円
91	未	普通	専門学校	中	販売	100～200万円	―
92	離	苦しい	高校	卒	サービス	100～200万円	―
93	離	苦しい	高校	卒	色々	なし	なし

きわめて重大な問題であるといえる。

第３項　女性老年層

女性老年層の個人平均年収は 91.2 万円、世帯年収は 229.2 万円である（表４－６）。これは、いずれも､男女全ての世代のなかで際立って低い数字である。定年等で仕事をやめて､年金生活になっているだけでなく、配偶者とも離別（６人）あるいは死別（５人）した者が多いためである。

女性老年層は、教育や結婚において、大きな不利益を被った人々である。教育に関しては、女性に教育は必要ないという意識が、多くの場面でまだ残っていた。中学校卒業後に何らかの学校へ進学した者は 19 人中５人である。また、４人は中学校へすら行けていない。アイヌ差別も、色濃く残っていたようである。

表４－６　女性老年層の階層形成過程

	結婚	15歳時点生活	最終学歴	卒業・中退	職業	年収・個人	年収・世帯
94	離	豊か	中学校	卒	運搬・清掃・包装	200～300万円	400～500万円
95	離	苦しい	中学校	卒	専門・技術	100万円未満	400～500万円
96	離	不明	小学校	卒	不明	300～400万円	—
97	既	苦しい	高校	卒	専業主婦	—	300～400万円
98	既	普通	高等専修学校	卒	専門・技術	100～200万円	300～400万円
99	再	豊か	高校	卒	専業主婦	なし	300～400万円
100	既	苦しい	中学校	卒	生産工程	100万円未満	200～300万円
101	再	苦しい	専門学校	卒	販売	なし	200～300万円
102	死	豊か	中学校	卒	サービス	100～200万円	—
103	死	苦しい	中学校	卒	サービス	100～200万円	—
104	離	苦しい	中学校	卒	販売	100～200万円	—
105	再	普通	小学校	中	専業主婦	100万円未満	100～200万円
106	既	苦しい	中学校	中	専業主婦	—	100万円未満
107	離	苦しい	中学校	卒	農林漁業	100万円未満	100万円未満
108	再	苦しい	高校	卒	運搬・清掃・包装	100万円未満	100万円未満
109	死	苦しい	中学校	卒	サービス	100万円未満	—
110	離	苦しい	中学校	卒	運搬・清掃・包装	100万円未満	—
111	死	不明	小学校	中	専業主婦	なし	—
112	死	苦しい	小学校	中	不明	なし	なし

属性も、その後のキャリアに影響をあたえた。15 歳時点の暮らしぶりが豊かであったという者（３人で、うち２人は和人である）は、必ずしも教育を経由してというわけではないが、いずれも看護師や大企業の正規職員といった安定した、あるいは収入のある職業についている。本人と直接関係のうすい部分で階層形成がおこなわれる世代であったといえるだろう。

第４節　「アイヌ支援」と階層形成

第１項　就学支援と階層形成

国や北海道は、アイヌの人々の社会的･経済的地位の向上を図るため、1974（昭和 49）年から「北海道ウタリ福祉対策」（1974 ～ 2001 年度）、「アイヌの人たちの生活向上に関する推進方策」（2002 年度～）により、長い期間にわたって数々のアイヌ支援をおこなってきた。北海道アイヌ協会（かつては北海道ウタリ協会）は、これらの事業の窓口として位置づけられている。

本節では、このうち教育に関する奨学金と職業訓練（機動訓練）をとくに取り上げ、これらがアイヌの人々の階層形成にどのような影響を与えているのかを考察する[2)]。

自身が教育に関する奨学金を利用したのは男性では青年層９人、壮年層５人、女性では青年層５人、壮年層５人の計 24 人である。制度自体まだなかったこともあり、老年層では利用者はいない。

アイヌの人々にとってアイヌ協会の奨学金はきわめて重要なものであるといえる。たとえば【17】は「大学へ進学できたのは奨学金があったおかげ」、【60】も「多分奨学金がなかったら進学できなかったと思う」と言っており、教育への支援が進学を後押ししていることがわかる。先に見たように青年層は教育達成が未だ経済的地位に結びついていない段階である。だが、アイヌ民族の貧困が指摘される中で、現在の青年層が奨学金で教育達成を高め、将来のキャリアにつなげていくことができるのであれば、この制度の影響力は今後ますます大きくなっていくことだろう。

第２項　男性の職業訓練

就学支援がアイヌの人々の生活や階層形成に大きな影響を与えているのに対し、評価が難しいのが機動訓練である。機動訓練を受けたことがある者は、男性で６人、女性で 15 人である。男性老年層で受けたことがある者は一人もいなかった。表４－７では、機動訓練を受けたことがある者の数と、その訓練が職業につながったかどうかを○×で表記した。

これをみると、男性は職業につながっていない×が６人中５人とほとんどである。たとえば【９】はアルバイトを転々と変えている時に、半年間工芸品づくりの訓練を受けた。しかし、結果としてはハローワークで見つけた食品工場の契約社員になっている。【12】も自営業をしていたが経営が悪化してきたため、パソコンの機動訓練を３ヵ月受けたが、現在の仕事は訓練とは無関係な肉の配送である。【14】や【16】は失業期間中に機動訓練を受けたものの、調査時点では無職であった。直接、訓練が職業に結びついた者は一人しかいなかった。

ただし、機動訓練は、職業には結びついていないものの、就職とは別の機能を果たすこともある。男性で唯一職業訓練がその後の職業に結びついた【31】は、東京で失業し職を転々としていた際に、東京在住のアイヌの人々が集まる居酒屋へ行き、そこでアイヌとしての意識を強めていったという。その後、札幌に戻り職業訓練で木彫りを習ったり船の伝承事業に参加したりするなかで、「生きたアイヌの文化に触れられて、素晴らしさに酔いしれてい」くという経験をする。その後、【31】

表４－７　アイヌ就学支援・機動訓練利用者（本人）

		奨学金利用者数	最終学歴別利用者数	機動訓練利用者数	機動訓練の効果別人数※2
男性	青年層	9人	大学・短大：4人 専修・専門学校：4人 高校：1人	4人	×：4人
	壮年層	5人	専門学校：2人 高校：3人※1	2人	○：1人、×：1人
	老年層	0人	—	0人	—
女性	青年層	5人	大学・短大：4人 専門学校：1人	3人	○：1人、×：2人
	壮年層	5人	高校：5人	8人	○：4人、×：2人、△：2人
	老年層	0人	—	4人	○：3人、×：1人

注）1.壮年男性の高校には高校中退１名を含む。当該ケースは高校入学前に通った専門学校時代に利用。
2.機動訓練の効果欄の○は訓練が仕事につながった者、×はつながっていない者、△は判断不能。

はアイヌ文化に関するプロジェクトを立ち上げたり、自らパフォーマンスを行ったりするようになっていき、現在はそれらの活動のかたわらで木彫りやペンダントを作って売っている。

【31】がした経験は、単に失業中に受けた職業訓練が現在の仕事に結びついたというだけのことではない。その過程で、民族意識を高め、自分の人生観をも変えていくことになる経験であった。同様に、【14】も、ピリカコタンで受けた木彫りの職業訓練をきっかけとして、アイヌの「ものづくり」に深い関心を抱くようになったという。「今度は織物をやってみたいと思った」と語るように、今後の活動へとつながっていく可能性を予感させる。

男性の職業訓練についてまとめると、以下の三点の性質が見えてくる。一点目に、男性は職業訓練を受ける者自体が少なく、また、受けたとしてもなかなか仕事には結びついていない現状がある。これは、これらの事業があくまでも職業訓練、就職支援であるという性質上、根本的な問題であるといえる。

しかし、だからといって職業訓練が男性にとってまったく無駄であるということはない。職業訓練は、失業中の男性にとって重要な意味を持ちうる。これが二点目の性質である。職業訓練には受講奨励金や受講支度金などの手当がでる。また、訓練を受けることで、当然の事ながら、様々な技術を身につけることができる。とくに青年層の雇用が不安定化している現状において、失業中に手当が受け取れ、また現時点で職業に直接結びついていないものの、今後職業として生かしうる技術を身につけられることは大きな意味を持ってくるだろう。

そして三点目に、職業訓練は、アイヌの民族意識の醸成という、職業とは直接関係ないものの、アイヌの人々にとっては大きな効果をもたらす可能性が示された。アイヌ文化の催しなどに関心をもたない、あるいは関心はあっても足を運ぶ機会があまりないような人々にとって、職業訓練という形でアイヌ文化と向き合えることは、大きな意味を持つといえるだろう。

第３項　女性の職業訓練

職業訓練の内容が直接職業に結びつきにくい男性と異なり、女性の場合は、職業訓練を受けた15人中、半数を超える８人が、訓練内容を一時的であっても職業に結びつけることに成功している。

【59】は、服飾関係の専門学校を卒業した後、服屋で販売のアルバイトをしていた。服飾関係の

仕事でも販売よりは作るほうがしたかったこと、また、体質上、立ち続ける仕事が難しかったことなどから、座ってできる仕事に就けるようにと、パソコンの機動訓練を受けたという。訓練終了後は自分でみつけた事務の仕事に就いた。【59】は、「機動訓練は役に立った」という。

その他では、夫が失業、もしくは収入が減った際に、家計の足しにするため刺繍や織布の訓練を受けたという者が多い。たとえば【72】は、怪我で仕事をやめた後、2009（平成 21）年の１月から３月まで刺繍の機動訓練を受け、その後実際に商品を売っていた。また、【97】は、配管工をしていた夫が、加齢の影響で高所作業が難しくなり、収入を減らすことになった。その際、刺繍や木彫りの機動訓練を受け、実際に販売することで「生活の足しになった」という。

特殊な例として、【95】はもともと民芸品を売る仕事をしていたが、店をたたみ、鎖彫りの職業訓練を受けた。しかし、もともと技術はあったため、とくに新しく習うこともなく、最終的には教える側の立場になっていた。その後、夫の手伝いで新聞の集配をしていたが、「やっぱり木にさわりたくなり」、鎖彫りの仕事を夫に隠れてしたという。民芸品づくりがもともと好きであるため、現在は娘の扶養に入っているが、「小遣い程度」に箸やネックレスなどを作り売っている。

また、【69】は、訓練内容自体が仕事に結びついたわけではないが、職業訓練を受けたことをきっかけとして、そのままアイヌ文化交流センターの職員となっている。職業訓練が間接的に仕事につながったといえるだろう。

このように、男性と比較して女性は、職業訓練が仕事に結びつきやすいという側面をもっている。ただし、これは手放しに評価できることでもない。女性が職業訓練で得た技術を利用しておこなっている仕事というのは、どれもパートや「生活の足し」であり、それで生活を成り立たせられるものではない。これが、男性にとって職業訓練が職業に結びつきにくいことの理由でもあると考えられる。現状では、アイヌ文化を職業訓練で身につけても、それで生計を立てることは難しい。職業訓練が、アイヌの人々にとっての生活の糧を生み出すようにすることは、今後の大きな課題であるといえる。

第５節　階層形成と分化の要因

ここまで、男女別、世代別で階層形成の過程をまとめてきた。その検討から、アイヌ民族の階層形成に関するいくつかの特徴がみえてきた。

第一に、青年層が置かれている厳しい状況がみえてきた。男女とも、個人の年収は著しく低い。教育達成としてはもっとも恵まれている世代であるものの、獲得した学歴が職業や収入に結びつかず、むしろ進学をやめ早くに就職してキャリアを積んだ者が、比較的多くの収入をえている。これはアイヌだけでなく現在の若者すべてにいえる大きな問題点であるといえるだろう。

第二に、男性壮年層、男性老年層では、学歴社会がある程度機能していることがわかった。その世代のなかで相対的に高い教育を受けたものが、経済階層上でも上位に位置づけられている。その点で、「良い学校→良い仕事→良い人生」という学歴神話を体現していた世代であるといえる。ただし、当然ながら学歴の獲得は完全に自由な競争の結果ではない。出身家庭の経済事情が原因で進学を断念した者も多い。また、進学するという選択肢がそもそも浮かばないという者も多くいる。その点で、学歴社会が機能していたというよりも、出身階層が学歴を介して到達階層を規定していくという階層の再生産を体現していた世代であるともいえるだろう。

第三に、女性にとっての「結婚」の重要性が確認された。壮年層や老年層の女性にとって、自らの経済階層は夫の収入によって決まるといってよい。女性の階層形成に重要なのは結婚し、その関係を持続することとなっている。この場合、さらに注目すべき点が２点ある。一点目は、出身家庭の経済状況や自らの教育達成などが、「婚姻関係にあるかどうか」という変数の前にほぼ無効化されてしまうことである。とくに女性壮年層は、教育達成については高校全入の時代に入ったため差が表れにくく、また、就職した後もバブル崩壊の影響で雇用が不安定化していくなかでキャリアアップが難しい状態となっている。そのため、本人の努力などが現在の階層に直接的な影響をほとんど及ぼさなくなっているのである。二点目は、結婚のもつ意味が大きくなるときに、民族問題のもつ意味もまた大きくなることである。壮年層、老年層においては、結婚の際にアイヌであることを敢えて隠すということがいまだに行われている。また、婚姻関係を継続することを考えた場合でも、ケンカの際に民族のことを持ちだされ、限界だと感じたという意見がいくつか見られた。差別はなくなりつつあるといわれる現状の中で、このような場面でふと表れる意識が、女性の人生に大きな影響を与えるのである。

階層形成と分化を考えたとき、男性については民族的な問題はあまり顔を出さなかった。アイヌであるということが階層形成に大きな影響を及ぼしうるのは、むしろ女性である。青年層の意見をみると、異性とのつきあいのなかで民族を意識する者は確実に減っているし、アイヌであることを伝えたら「逆に尊敬された」などという者もいた。アイヌであることが階層形成に不利な影響を与えることは、青年層の世代以降は薄れていくのかもしれない。

注

1）結婚に際しての差別について詳しくは第７章を参照されたい。

2）アイヌ協会とアイヌ支援について詳しくは第 10 章を参照のこと。

参考文献

小内透編著 , 2009,『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その１　現代アイヌの生活と意識――2008 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

北海道環境生活部 , 2007,『平成 18 年北海道アイヌ生活実態調査報告書』北海道環境生活部.

（野崎剛毅）